
二十五世紀

三位三体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二十五世紀

【Nコード】

N9690W

【作者名】

三位三体

【あらすじ】

二五世紀。たった数百年の年月を重ねただけで、どれほどまでの変化が起きるのだろうか。人類は生存しているか、文明はあるか、はたまた宇宙へ飛び出したか。全ての所、現在調査中。つまり、まだプロット無し。

——【二五世紀】というタイトルで行われるリレー小説です。現在進行形で作品が作られている為、これから先の内容は全く決まっております。もしよろしければ、見て頂ければ嬉しいです。

第一話（作者：大岸都心）

25世紀

かつて人類が想像した未来の状況とはどのようなものだっただろうか？

例えば遠くない未来に比較的仲の悪い隣国と戦争しお互いが疲弊したのち大量破壊兵器に国を焼かれ死の大地となったなどの悲劇的な様相を呈したもので、あるいはそれこそ昔の作家の妄想により塗り固められ作られた御伽噺の様な明るく、優れ、希望に満ちたものであったものかもしれない。

いや、実際そのような事を全人類が思っていたかどうかまでは分からないが今この25世紀に繋がる歴史や資料（中身の無い雑誌や少年たちが手にしていたであろう漫画、映像データなど）が少なくとも一部の人間がそのように思っていた事を物語っている。

だがしかし、その世代の人間がどのような夢を見た人間がいたとしても現実というものは対してドラマチックにできているわけでもなく唯々そこに在るばかりに過ぎない。それは近代史の資料に書かれている数世紀でいくらかの国が滅亡したとか平均寿命が落ち込み人類は高齢化社会を脱したとかの文字がまるで楔のような文字で踊っていたとしてもその事実とは別に個人にとっては重要ではなく、他の記憶しなければならぬ情報の一つでしかない。

ふと、そばにある時計に目を移す。時計がもう就寝すべきである

数字をとつくに超過している。

この時計、数世紀前に製造され現在では使用されているものではないが最近になり企業の販売戦略として復刻され新しく作られたものだ。（復刻と銘打ちながら真似たのは外観だけで素材は別物で内装は市販されている時計と変わらないのはきつと皮肉だろう。販売数は振るわなかった事も含めて）

しかし、このような物の方が先ほど目を通していた唯の情報を示す資料よりも幾分か過去に触れている感じがする、それはきつと数世紀たつても視覚がそのデザインに惹かれる事がなにより過去と今を結び付けていると考えさせうるからだろう。

第二話（作者：からすみそ）

数世紀前から見た25世紀。つまり過去の人間にとって未来の世界

過去、多くの人間が未来という不明確な世界を想像し、恐怖し、期待し、何より確信していた。

未来があるという事を。

戦争が起きようと、資源が枯渇しよう、大災害が起ころうと、未来と云う不明確なモノ自体は必ず存在している。誰もがそう確信していた。そう、例えば人類が滅亡しようと、地球が崩壊しようと、漠然とした時間の流れだけは決して止まらない事だけは過去の人間は確信していたのだ。

それは、この時計を見ただけでも、それは容易に読み取れる。

数世紀前に発売された当時、『五世紀先でも大丈夫』というのがこの時計の煽り文句であった。つまり五世紀経ったとしても一秒も狂う事無く時間を刻む事が、この時計に課せられた使命であり、その為の技術はこの内部に集約されていた。

この事実だけを見ても分かるだろう。この時計を始めて開発した時の人間は、例えば人類が滅んでいようがいまいが、500年先は存在すると確信していたのだ。だからこそ、500年先でも狂う事のない時計を開発したのだ。

時間の流れという、ある種根拠のない現象が永遠に続くであろうと、確信し、これを製造したのだ。

では、彼らが確信していた未来という名の時間の流れは、存在していないのか。

否である。

過去に生きていた人類にとっての、未来は確かに存在している。存在していなければ、私という存在もこの場にいる筈がないのであるから、未来が存在している事は確かである。

だが、それが彼らの想い描いていた未来であるかと言えば、その答えも否である。

時間の流れは常に一定ではない。
故に、未来とは常に一定ではないのである。

分かりにくいだろう。
だが、あえてこう説明しよう。

未来では人類は滅亡し、また栄えている。文明は発展し、また滅びている。

世界は破滅し、戦争はなくなり、争い事は絶えず、資源は枯渇し、暮らしは裕福になり、飢えに苦しむ、平和的で、悲惨で幸せで、破滅的な未来が存在しているのだ。

意味が分からなくて、結構。理解しがたい事は、私が理解している。

だが、二五世紀の現状を表すなら、アレがもっとも適当な言葉なのである事も、理解して貰いたい。

もう一度だけ言おう。

世界は危機に陥っている。そして平和でもあるのだ。

何故なら、時間の流れは常に一定ではなく、故に未来も常に一定ではないのだから。

第三話（作者：一日三食）

あえて判りにくく説明したために、おそらくこの未来を理解している者はいないだろう。

仕方が無いことだ、理解しがたい事ではあるが、次は簡単に説明しよう。

この説明によって理解することができかもしれない。

だが、決して理解することはできない。

過去にとつての未来について、未来という今について。

時間というものは2つある。

常に流れている「恒常的な時間」と、観測者がいて成立する主観的な時間の流れだ。

そして、その流れは一日千秋という言葉があるように観測者の状況、思想、感覚その他様々な物によって時間の流れというものは変動する場合がある。

この言葉は、“会いたい人に会えない一日”がその観測者にとっては耐えがたい事で、自分だけが時間を長く感じている状態で生まれた言葉だが、過去の人の多くは何と大げさな、と考えただろう。

恋を知る者はその気持ちに同意したのかもしれない。

だが一日会えないだけの事でも、未来のものの多くはその気持ちに賛同するだろう。

その言葉を考えた人間は予想していただろうか、

「恒常的な時間」の一日が、千の秋を巡るほど長くなると言うことを

いや…少し誇張してしまったかもしれない。昨日や一昨日という日が本当に千の秋を巡っていたかは自信を持って断言することができない。

なぜならそれほどまでに昔の事で、数えることが億劫になるような一日だったのだから。

ふと、そばにある時計にもう一度目を移す。この時計は作られた500年前の基準なら、500年の時を耐えきったのかもしれないが……どうやら、時計より先に時間の方が耐えきれなくなってしまうらしい。

中は今に合わせて作られているが、昔の中身のままであるならば、正常に動いていながらも秒針がピクリとも動いていなかったらう。暦の上では500年しかたっていない現代は、500年耐える時計が跡形も無く消えて、皮肉の利いたアンティークとして記録情報から再現されて売られ始めるような、まずはそんな未来になっているらしい。

この説明でまずは簡単に理解することができただろう。そしてまだ未来を一片たりとも理解できてはいないだろう。

第四話（作者：大岸都心）

さて、物思いにふけりつつこの今にも鬱屈な気分で気が滅入ってしまふ資料を片付け今日は睡眠を取る事にする。

どうにも活字に目を通しているとついつい他の要素に思考が移る癖がある。

無論このような癖は悪癖であるとは認識しているがどうにも私はこの悪癖に身を任せている瞬間に一種の喜びを感じてしまっている。

「人は考える葦である」どこかのお偉い方の名言らしいが私はこの言葉を存外に気に入っている。思考こそが人を人たらしめるだとするならば、ある意味この無駄な時間こそが一番人間らしいのではないのかと思うと何故だか意味のない行為に命が吹き込まれたようで気分が良くなる。

そのような無駄で意味のある思考の最中にも時計は無慈悲にもさらに時間の経過を示していた。もうあまり睡眠を取る時間はないが眠らないよりはよっぽどマシなので床につく事にした。

——朝

年代物モドキがまるで自身の存在を示すかのようにけたたましい自己主張を開始したことにより私は目が覚めた。時計に総合格闘技では禁止とされているような動作でボタンを叩くと彼の自己主張は終わりを迎えた。

昨日の無駄な思考によって長い事起きていたせいか胃がくうくうと音を鳴らし自身が空腹である事を認識する。このような時に誰かがコーヒーの匂いと共に朝食の準備をしてくれればと思ってしまうが生憎この家には私一人しか住んではない。

仕方がないので電熱ヒータを作動させその上にフライパンをやや無造作に置く。次に、ヒータが暖まったらベーコン（自作：本当は市販されている製品を買いたいが残念ながらそこまで懐に余裕がない上に味もそこそこ程度でしかない）をまんべんなく敷き詰めそこに鶏卵を三つほど落とし少し待つ、卵のふちが白く染まってい、じゅうじゅうと加工肉の脂とスパイスの混ぜ合わさった匂いがあたりに充満する。ここで水を僅かにふちから円周上に垂らし蓋をする。蓋の透明な部分から煙により卵が蒸されていくのを確認しながらパンをトースターにぶつきらばうに放り込みスイッチを入れる。これでフライパンの中身を皿に移せば今日の朝食は完成する。移す時に卵が一個割れてしまったが及第点だろう。

出来合いのミルクティーとパンの為のシロップを用意し1人の食卓を満喫する。パンの半分はシロップをつけ残りは卵とベーコンを乗せて食べる。これが私のささやかな贅沢だ。

しかし、贅沢な時間が終わりを告げるのは早いものでもうそろそろ私は自分の巣から剥いでなければならぬ予定がある事を思い出した。

さて、そろそろ行くでしょう。食卓を片づけ残ったミルクティーを一気に飲み干すと私は家を出た――

第五話（作者：からすみそ）（前書き）

他の奴ら、面倒な設定とか所全部押しつけやがって……。
いや、いいんだけどね？

でも、シーン書きたくないからって、変な先延ばしとかだけは勘弁して欲しい。
いや、いいんだけどね？

第五話（作者：からすみそ）

扉の外の世界は崩壊していた。

空は薄暗く淀み、かつてビルと呼ばれた建築物が崩壊し砂を被り、時折吹き荒れる突風が砂利を巻き上げ、砂煙を撒き散らす。陽という概念はそこになく、ただただ淀んだ曇り空が永遠と続き、台地には水分を含まない砂だけが永遠と続いて行く。

紛うこと無き、死の世界がそこにあつた。

世界は既に崩壊しきつていた。文明は滅び、人類は絶滅し、生物も数種類を除いて殆どが息絶えている。この場が嘗て活気ある市場であつた等と、誰が想像できるだろうか。今、目の前にはただの砂漠が広がり、石とガラスと鉄が混ざり合つた奇妙なオブジェが所々に形をとどめているだけなのである。

その様な場所であるが故に、今私が後ろを振り返つたとしても、そこには永遠と続く砂の山しか見えない。私が優雅に朝食を食べていたあの家に続く扉は、この世界には存在していないのだ。

一歩踏み出すだけで、踝まで足が砂の中へと浸かる。長めのブーツのお陰で、靴に砂が侵入する事はないが、それでも歩きにくい事はこの上ない。

ザクザクとまるで氷が砕く様な音をたてながら、私は砂漠の中を

歩き始める。まあ、この場所は昔の人類がイメージする砂漠とは違い太陽が照っていないのだが。

それでも、永遠と続く砂の上を歩き続けるという行為は、まるで冒険家か、それともSF映画の主人公にでもなったような気分になる。妙に高揚した気分になるが、自分以外誰もいない世界等、30分も歩けばそんな気分など消し飛ぶに決まっている。

ただただ、早く付かないかと考えながら、流れてくる汗を拭い、私はただ目的地を目指して歩き続ける。

崩壊したビルが見えてきたのは、自宅から四十分も歩いた時だった。他のビルと同様に風化が進み、殆ど瓦礫の山となっているが、元が巨大なビルだった所為か、まだ若干の形だけは残し、それが元々はビルであった事だけは認識できるようにになっていた。

認識できる要因としては、特に奇跡的に残っている一階部分の玄関が大きいだろう。既に彼方此方がひび割れ、風化しており、入口には扉なんてものもない。だが、そこがかつて入口であったと分かるだけでも、奇跡的な出来事なのだ。

そんなビルの入り口を前にして、私は、ようやく目的地につけた事に安堵し、小さく息を吐き出す。そして、汗を拭くと、ビルの敷地に足を踏み入れた。

その瞬間、スーツを着込んだ女性とぶつかる。

「おっと、すみません」

「いえ、こちらこそ」

此方が詫びると同時に、女性も詫びる。そして彼女は高級そうな絨毯が引かれた綺麗なビルの中を、何事も無かったかのように忙しそうに歩いていく。先程まで風の音しか響かなかったこの場に、突然人々のざわめきが生まれる。周囲を見渡せばビジネスマンが、綺麗に掃除されたビルの中を忙しそうに歩き回り、ホテルマンがそんなビジネスマンを笑顔で見送っている。

服の砂を払いながら、ホテルの外へと足を踏み出す。

そこには活気に満ちあふれた市場があり、観光で訪れたであろう人々が朝市を物色している。空は青く広がり、幾つものビルが空へ向かって伸びている。

何気ない日常。数世紀前と何も変わらない世界が、そこに存在していた。

私はその事を確認すると、襟を正し、雑踏の中へと紛れ込んでいく。

——さて、仕事の時間だ。

第六話（作者：一日三食（未遂））（前書き）

自分には考えた脳内設定の説明を延々書いていたり、無駄な行動を事細かに書いていることの方が性に合うと発見。

第六話（作者：一日三食（未遂））

仕事——この人類が死滅した世界の中で、生きる糧を得る手段は限られている。

第一次産業が殆ど壊滅しているこの世界では本来ならば水を手に入れることすら難しい。

安定供給することのできる方法が無ければ数少ない食料と水を奪い合って殺し合い……この場所がこうして存在することも無かつただろう。

急いだ方がいいかもしれない時間だが、まずは仕事に出向く前に着替える必要がある。

慣れているとはいえ日差しを避けるための服と砂漠を歩くためのブーツで汗をかいた。

私の仕事は恰好を気にするような事はないが、私はそれに甘えるようなつもりは毛頭ない。

辺りを見渡すと、街の喧噪の中にぽかりと穴があいたように避けられているスポットがある。仕方が無いとはいえ露骨に避けられているように見えてしまい、今からそこに向かう自分にとっては良い気分がするものではなかった。

そこにあるのはデザインも重視したビルが並ぶオフィス街に紛れた（紛れた？）、コンテナの更衣室への扉……いや、紛れていなかった。不釣り合い過ぎて笑いがこみあげてくる……いつも使っているが私以外の使用者を見たことが無いし、今後見ることも無いだろう。

中へ入ると私はまず服を全て脱ぎだした。仕方が無いとはいえ汗で背中にピッチリ付いたシャツは1秒たりとも着ていたいものでは

ない。裸になつてから脱いだ服を全ていつもの場所に置き、汗をタオルで拭いてから素早く用意してある服に着替える。

この街は一言で言えば夢の場所。夢のような場所ではなく、目が覚めたら逆に気分が悪くなるような、そんな心地よすぎる夢の、逃避の場所——それは決して現実では無くて。

ここの正体は既に滅びた文明のうち数少ない現存するプラントの一つ、栄華を極めた文明の力の一端と、その時の映像をを垣間見ることが出来る。何気ない雑踏、活気にあふれた街の様子、それらはすべて過去の遺物…泡沫の夢だ。

この死滅した世界の中で生きていくこと嫌った一部のモノ達は、偶然にも運と実力を持つていたのだらう。この砂漠と化した世界の中で崩壊したビルからまだ使えるものを発見、中にあったプラントを再現して機能させたのだ。ただ、過去の文明の光景を外見だけを完全に再現しようとするという後ろ向きな方向に全力を注いでしまったが。

再現されたプラントは様々な種類がいくつもあるが……私が詳しく説明できる場所は一つしかない。

家は朝食を済ませた後に慌しく出てきてしまったので、今更なタイミングではあるが鏡を見ながら身なりを整え万全の準備を整えてから更衣室を出た。

今から行くのは自分の仕事場であり、今の世界に深く関わっているあの場所——

第七話（作者：大岸都心）

さて、今着替えた服だがやはりこの服はどことなく息苦しい。

しかし、この息苦しさこそがここから先に向かう為には必要である。この息苦しさは服（服と表現するよりもスーツの方が適切か）の内部循環機構によって外気との接触などをシャットダウンしているからである。私の仕事にはこの服が必要だ。確か略称はDEB・スーツと言っらしい。

——「あー、あー、聞こえていますでしょうか。もし聞こえないようでしたら循環機構をストップします」

スーツに取り付けられた通信機から声がする。これまでに何度も聞いた皮肉交じりの声だ。

「そのような機能は存在しないと思うんだがやめてくれ。」

機械越しの相手に応答する。声の主は私の同僚だ。

「聞こえているじゃないですか。おはようございます、遅かったですね？」

この場の端々に茨の棘の様なものを感じるがそんなものはいつもの事だ。

「仕事前の事前の準備が長引いたんだ、許してくれないか？」

謝る気などさらさらないが返事をする。

「まあ今日はおおめに見てあげましょう。時間が無いので今日の仕事の概要を説明しますね。」

——頼む、と相槌を入れる。

「今回もただのく掃除とゴミ拾い>です。ただ、比較的新しい場所なのでもしかしたらそれ以外にも働いてもらうかもしれませんので携行物資は多めに用意してあります。」

「それと、あなたの趣味のオモチャも整備終わっていますよ。あん

なものの使うくらいならもう少し働いてください。」

「ありがとう、親父さんにお礼を言っておいてくれ。」

「了解です、それでは馬車馬のようにキリキリと頑張ってください。」

ブツツとした音を最後に声が聞こえなくなる。

私は先に進み右の小部屋のドアを開けロッカーから用意された携行品とオモチャを身につけると急いで地下へと続く階段を下った。

地下へと続く階段をひとしきり降りると今日の仕事場である地区を示すマークが目に残る。

先ほども少し触れたがここは最近発見された地区で比較的危険性が高いとされている。

だが、今日は掃除とゴミ拾いなのでそこまでの危険性のあるエリアまでは行くような事はないだろう。

万が一に備えオモチャに装填を行う。これである程度の事態には対処できるはずだ。

最もゴミ拾いも含まれるためコレを使うような間抜けなマネは避けたいものだが――

第八話（作者：からすみそ）（前書き）

矛盾怖い、矛盾怖い。

第八話（作者：からすみそ）

マーカーがつけられている扉の奥には、新たなプラントがある。それはこのプラントとは違う、常に変動し続ける渦のようなプラントだ。

ホテルにあったプラントはいつ来ても、変わらなかった。そこにはいつもの様に忙しそうに歩きまわるだけの人々が、永遠と流れていた。楽しそうな笑顔を浮かべながら人々は、ただ波に乗る様に歩いて行く。

この場所はいつ来ても、そうだった。

人々の生活を創り出した人間は、この場所に時間を配置していなかった。

永遠に朝の多忙な時間帯をループさせている虚像。私はこれを設置した人物の事は何も知らないが、それでも彼（男性か女性かは知らないが、便宜上そう呼ぶ）がこの世界に絶望した事だけは理解している。

時間が壊れた世界。

そこには朝も昼も夜もなく、そこに置かれた人々はただただループを続けている。

このプラントは絶望を表しているのだ。
彼のこの世界への深い深い絶望を。

そこまで考えて、私は少しだけ首を振った。
ダメだな。昨日の夜から、随分と感傷的になっているのが自分自身でも分かる。

いつ終わるかも分からない地道な作業。人の姿が見えない荒廃した砂漠。そして永遠と続く日常と、壊れてしまった時間。

その全てが私の心を細かなヤスリのように削り取っていくが、手に取る様に分かってしまう。削れていく心は目にも見えない程に少量ずつだが、それでも確実に私の心から何かが削られている。ゆっくりと、無慈悲に、残酷に。

心を強く持たなければならぬ。

私にはまだやる事が、山の様に残っている。

それは何もこの世界だけではない。これから先、まだ永遠と続くだろう世界に仕事が残っているのだ。

私は大きく首を振り、ネガティブな思考を追い払うと、DEB・スーツに搭載された機能を起動させる。

その瞬間、特殊なプロテクトが身を包んでくれる。これで、この先のプラントでどのような行動しても、私がプラント世界で押しつぶされる様な事はないだろう。

それにしても、この場所に安全なプラントがあった事だけは、このプラントの制作者に感謝しなければならない。

いつどこで襲われるかも分からないプラントの中で、悠々と着替えが出来、尚且つプラントからプラントへの移動が容易になったのだから。

身体を少しだけ動かして、違和感が無い事を確認する。

プラントに完全に身体は溶け込み、DEB・スーツに異常はない様だ。プラント、つまり俗に云う電腦空間では、僅かなミスも身体 of 崩壊に繋がってしまうのだから、ごく自然に確認の動作を行うのが、癖になってしまっているのだ。

既に私の身体は、砂漠のあったあの場所ではなく、電腦空間に完全に溶け込んでいる。

完全に準備を整えたのを確認すると、私は次のプラントへと繋がる扉に手をかける。

信頼できる空間は、この地下まで。

コンテナから続くこの地下は、本来繋がっていないプラントからプラントへ移動を可能にさせる為に、仲間がぶち込んだプログラムであり、この先は仲間の手が加わってない安全ではないプラントなのだ。

それでも、私は進まなければならない。

私の仕事は、このプラントの中にある、有害なモノを片付け、散乱している資源を回収しなければならない。

それも、迅速に、慎重に、私一人で。

数人の仲間も、文明によって滅びたこの砂漠の世界で仕事をしているが、私は運が悪い事にプラント内部の担当に抜擢されたのだ。

まあ、砂漠の世界を永遠と掘り返し続ける作業と、プラント内部の作業。どちらが辛いかは、人それぞれだろうが。

一度だけ大きく深呼吸をして、気持ちを切り替える。

この先は、一瞬の判断の遅れが命取りになる可能性もあるのだ。

そう考え、私は気持ちを切り替える。そして、完全に気持ちを静めた後に、新たなプラントへの扉を開いた。

第九話（作者：一日三食）

「今からゴミ拾いを開始する。」

報告のように通る声ではつきりと言葉を発したが通信は切ったままだった。

これは自分に言い聞かせる以外の意味は無い。いつもの儀式のようなものだ。

プラントの内部に足を踏み入れると、瞬間、足に物凄い抵抗がかりつんのめりそうになる。

なんとか倒れることを防いだ自分の前にはあつたのは膝まで浸かる程ある水と、真っ赤な空と真っ赤な水平線だった。一応遠くに島のようなものがこのまま歩いて島にたどり着く頃にはずいぶんな時間と体力がかかってしまうだろう。

今日はハズレか—— ついばやきたくなってしまうのは、昨日が当たりだったせいだろう…… 昨日は足場が良く、楽すぎたせいで反動が辛い。

この仕事を担当する様になってから様々なプラントに足を踏み入れたが、一度も同じ光景のプラントなど無かった。

プラントの光景は、基本的にその中のデータが反映される。

当たりのプラントであれば、文明的な何かが映されている場合が多いが……このプラントは水質調査が生まれたばかりの地球の記録か、もし大当たりなら海や海鮮食材に関するデータや機材か——
——当たり前なら食卓に魚が並ぶようになる日も近いかもしれない。

そのあたりはプログラマー達の腕の見せ所だが、このプラントをどう判断してどの様な手を加えるのかは、現場の人間では干渉できない。

最前線で働いている者としての見地から、プログラムを作っているだけの連中では気付かない事を教えてやろうと以前レポートにまとめて通信機の向こうのあいつに渡しておいたが、返答が返ってこないことを鑑みるに現場の声など一顧だにしていないうた。

じゃぼじゃぼと足音を立てながら少し歩いてみる。水には波も流れも無い、水底は平らで障害物も無い、歩いているだけなら足を取られる事は無いだろう。

だが問題はここでゴミ拾いをする方法だ。

活動内容のゴミ拾いとは——このデータの世界を調査にまとめること、そしてそこに存在する資源を安全なプラントまで持ち帰り解析することだ。

プラントを利用するには、プラント内部からの詳細情報がプログラムを打つために必要なことらしい。

だが、滅多に無いのだが、今回のように近場に持ち帰るものが見当たらない場合がある。残念ながら魚は泳いでいないらしい。水は赤く空を反射しているが、波も無く透き通っているため水底に何も無いのがよくわかりこれ以上歩く気を簡単に削いでくれる。袋に水を入れて持って帰ってもいいが、水の世界で水を持ち帰ってもあまりに芸が無い……

必然的にゴミを拾うために遠くに見える島に歩いて行かなくてはならなくなる。

通信の向こうでの言葉を思い出す。「<掃除とゴミ拾い>です。ただ、比較的新しい場所なのでもしかしたらそれ以外にも——」
「何をやる事になるかはわからないが、まずはあの島に行く必要があるだろう。」

私は膝上まである水を見ながら「泳いだ方が速く着くのではないかな？」と考えながら歩いて向かった。

第十話（作：大岸都心）

島に着くのには大分時間が過ぎたように思える。

それはまるで暗に島が私の進入を拒み受け入れることを望んでいないかのようであった。

島に到達する。同時に長い深呼吸。あたりを見回す。携行品のチェック、確認。

それらを数十秒間で行うと私は酷い不安感を覚えた。

——ここは本当に島なのだろうか？

表面上は間違いなく島の様相を呈しているが何処かに違和感がある。私はその違和感の正体も掴めぬまま歩いている途中に見えた島の空洞の様な部分へと歩みを進めた。

結論、島では無い。

空洞の前に赴きそこに存在する不釣り合いな機械の類を見て確信する。

「これは拙いかもしれないな。」——通信機を作動させる、応答ナシ。悪態。

ならば、と移動を再開する。

幸いこの先の空間はあまり危険な物はなさそうだ。

通信からのノイズが気になるが好奇心故に歩みを止めない。

——どれほど歩いたであろう。

予想していた空間の長さを超過し、スポーツでもやらされたかのようにつきいくらか部屋を探索する。

どれも何もない空間が広がっているのみであり、今は最後の部屋と

思われる部屋を開けた。意外な事に中は先のロッカールームとそれほど変わらない小さな部屋であった。

その部屋の中で私はメモ帳と割れた試験管、それに<何か>を発見した。

何かとはデータが私の視覚に変換されないので理解が出来ない。

この電腦においてもデータは五感に変換され私の知覚しやすい形状を取る筈だが眼前のソレは頑なに変換を拒んでいた。——これは一体何だ？

突如上から雷鳴のような耳を劈く轟音。閃光。跳躍。回避。着地、失敗。

「南無三！」

手元にある携行品の一つパルススモークグレネードを投げ、煙幕とパルスショックを展開。急いで<何か>とメモを拾い部屋をから飛び出す。

部屋の内から大きな蟲が出てくる。おそらくは防衛プログラム。

「畜生がつ。」

一人つぶやき、オモチャに手を伸ばす。安全装置を外し、そして。

「悪いが、死ぬならベッドの上か誰かに看取られながらがいいんでね！」

引き金を、引いた。

現実世界ではかなり口径の大きな弾頭がマズルフラッシュと共にとめどなく蟲に突き刺さり決して小さくない穴をあけ胴体を削り取っていく、そのうちの一発が決定打となり蟲は奇妙な叫びと共に爆散した。

ふう、と息を整える。

「減給、よくて始末書かな？・・・」
危険が去りあたりを見回しながら即物的な思考が脳裏に浮かんで
消えていった。

第十一話（作者：からすみそ）（前書き）

夜中に更新！……人を引きつける文章を書いてみたいです。

第十一話（作者：からすみそ）

はき捨てるように、悪態をつきながら私は入ってきた扉に向かって駆けていく。

背後を振り返れば、そこには先ほど倒したはずの巨大な蟲がこちらに向かって襲ってきていた。

その数は一匹ではない。

十数匹、いや何十匹だろうか。兎に角、30は超えそうな数がこちらに向かって羽ばたいて来ていた。

黒い甲殻に覆われ、茶色い羽根を広げながら迫りくる蟲。

その姿は生理的嫌悪を刺激するには、十分な姿であった。

「多いな、畜生！」

腰元にぶら下げていたグレネードを、蟲たちに向かって投げつける。

一瞬の時間をあけて、グレネードから大量の煙が噴出された。

このグレネードには、プログラムである蟲たちに対する、煙幕プログラムが内蔵されているのだ。

多量の煙により、混乱に陥る蟲たち。
だが、それも一瞬の事。

すぐに煙を何処かへと消し去り、私の方へと一直線に向かってくる。

滅んだとはいえ、私たちよりも遥かに技術が進歩していた時代のプログラムである。当然ながら、一筋縄で行けるはずはなかったのだ。

「おい、応答しろ！ 早く！」

未だにノイズ音しか吐き出さない、通信機の電源をオンオフ繰り返しながら、私はできる限りの速度で走りだす。だが、保護プログラムのかけ過ぎで体が思うように動かない。

現実世界で言えば、装甲を固めすぎて、総重量が重くなってしまったようなものだ。

いくら安全の為とはいえ、やりすぎた事に軽い後悔を覚える。装甲を貫く力を持った兵器には、ただの重しでしかなくなっているのだ。

蟲と距離は縮んでいく一方。

もはや、後数秒で私の元までやってくるだろう。

全身が恐怖でひきつる。ひきつった所為で、体が思うように動かせない。

恐怖。絶望。そして、拒絶。

幾つもの感情が身体を駆け巡り、自分の命があと数瞬で消える事を悟る。それは覆し難い事実であった。

だが、

だけど、

いや、だからこそ、私は押し迫ってきた死を可能な限り、拒否し続ける！

手元にあつたオモチャの銃弾を補充し、一番近い蟲に向かって発砲。それと同時に、幾つもの護身用のプロテクトを機動させていく。

脳天にオモチャから放たれたプログラムを全身に喰らい、奇声を上げながら一匹の蟲が消滅する。だが、それで止まるようなプログラム群ではない。

数秒だけ伸びた命で、私は自分の所持する攻撃用のプログラムを全て作動させる。

このような場合を見こして、私は特別に一度の動作で全ての攻撃プログラム機動を可能にさせるスーツを特別に受注していたのだ。

「ああ、畜生。帰ったらまたどやされるな」

惜しむ事のない大盤振る舞いを続けながら、私はそうつぶやく。幾つもの攻撃・侵略用のプログラムが蟲の体を蹂躪していく。完全に機能を止める事は不可能だろうが、少しの間だけでも動きを封じる事は私たちの技術でも十分に可能なのだ。

そして、それを確認しながら、さっさとプログラムの防護壁を完成させる。

蟲の通行を妨げるだけの単純なプログラムだが、単純な故に攻略には時間がかかるのだ。

そして、体を包み込んでいる逃走以外の目的では不必要のプログラムを全て外すと、私は入ってきた扉に向かって一目散に駆け抜け

る。

その甲斐あってか、後方で防護壁が破られる爆音を耳にしなが
も、私は元のプラントへと戻る事が出来た。

未だに雑音しか排出しない通信機をいじりながら、乱れる息を整
える。

手元に眼をやると、持って入った物はオモチャとDEBスーツ以
外すべて内部に置き去りに。持ってこれた物なんて、＜何か＞とメ
モだけである。

「減給、いや下手したらクビかもしれないな」

散々な結果になった事に、私は重いため息を吐き出しながら、今
日の仕事を終えたのであった。

第十二話（作者：一日三食）

乱れた息を整えても、私は未だその場を動けずにいた。

命がけで体を動かした後だからだろう、いつも以上に心がすり減った。

手持ち無沙汰になり、じっと通信機をいじりながら、先ほどの島での出来事を思い出し反芻する。

今までプラントでは見たことが無い＜何か＞の発見と防衛プロゲラムからの逃走。

好奇心に駆られ、危険は無いだろうと油断していた自分に自己嫌悪する。

渡された携行物資を使い切った原因である収獲のこの＜何か＞——これは今日の失敗を帳消しにする程のモノだろうか。だがそれ以上＜何か＞について考えようとは、今は思えない……島に不釣り合いな空間を見つけた時に燃え上がった好奇心は、水をかけられたように消えてしまっていた。

今日は他の仕事もあるかもしれないと言っていたが……この有様ではどうすることもできないだろう。

「——こえ……ま……か。いい……げんに返事をしないと本当に循環機構を停止しますよ。」

「だからそれは止めてくれと言っているだろう。」

通信機から、ようやく雑音以外の音が聞こえてきた。だがこの嫌味たらしい声を今聞くくらいならこのまま繋がらない方が良かったかもしれない。

「……ようやく繋がりましたか。今日は馬車馬のように働くよう言いましたよね？今後、通信を放置するようなことであれば大事なおもちゃで遊べなくなりますよ。」

「通信が繋がらなかったのはプラントの影響だ。そして今日はそのオモチャが活躍したので、大目に見てくれると助かるのだが…。」
通信の向こうからいつもより3割増しの棘を感じる。こちらの調子がいつも通りなら軽く流して話を進めるのだが、失敗の後だからかつい下手に出てしまった。

「ああ成程。つまり通信できないのをいいことにオモチャで遊んでいたと言うわけですか。」

おそらく、通信先ではこちらの状態からどのような事態があったのかおおよそは把握しているだろう。

心身共にボロボロなのは判っているのに……いや、判っているからこそ、この態度。言葉にはいつもの棘の他に苛立ちが多分に含まれていた。

「今日してもらはずだった仕事は明日してもらいます。ですが、明日は携行物資があると思わないことですね。今日の提出を済ませたら、報告と始末書と土下座の準備をして親父のところに向かいなさい。」

一方的に通信を切られた。首になるというのは流石に杞憂だったか、それとも親父さんの判断に任せて勝手なことを言わないだけかもしれない。

もつと嫌味を言われるかと思ったが幸いなことにそんな時間が惜しい程、忙しいらしい。

さて、提出といっても今日提出するこのく何かは今までと毛色が違う。このまま大人しく提出してもいいものか。親父さんのところに行く前にこれについて何かわかれば、今日の事態の説明がしやすくなり、免罪符として使えるのではないだろうか。

分析など門外漢のためにく何かについて今すぐ調べるような真似は私にはできない。しかし、幸いにも一緒に部屋にあったメモ帳のように解りやすいデータなら、（勝手に）機材を使えば私でもす

ぐに分析することができらるう。親父さんたちの方は今忙しいだ
ろうから多少報告が遅れてもこちらに催促が来るようなことは無い。
消えたように見えて燻ぶっていた私の好奇心が、再び音を立てて
燃え上がっているような気がした。

第十三話（作者：大岸都心）

——ちよつと待て

よくよく考えたらあの親父さんの事だ、そういったものはまず自分が納得するまで解析をしてから報告するだろう。そもそも、上に報告なんて事よりも技術屋の親父さんは目先の技術に頭が行くはずではないのか？

そう頭の中で思索しながら電腦から抜け出しスーツ脱ぐ。

どうにも電腦から抜け出る感覚は未だに順応できない。

何と言えばいいか無意味な虚脱感にさいなまれるのだ、これがどうにも受け付けない。

スーツを脱いで荷物を持って外に出る。

後ろから肩に手をぶつきらばうに置かれる、振り向くとそこには利発そうな顔をした私の同僚が何やら神妙な顔立ちで立っていた。

「お帰りなさい、待つてましたよ？」

喜怒哀楽のいまいち掴み辛い声で話しかけられる。

私は何気なくただいま——と返事をした。

「オペレート中のデータ報告とスーツからの損傷から察するにこつびどくやられたみたいですね？」

「そうなんだよ、だから許してくれないか？」

私は若干懇願するように同僚を見た。

「別に怒っていませんよ、いつもの悪癖です。」

——知っている、だからこそ聞いているのだ。

「そうだ、親父さん今日はどうしている？」

私は一刻も早く親父さんに訪ねたかった事を思い出しそう尋ねる。

「今日は技術科に引きこもっていますから無理でしょうね。」
その言葉を聞いて軽いショックに襲われたが親父さんならしょうがないと心の中で整理した。

「ま、兎にも角にも報告書と始末書です。私も自分の分があるので少しなら手伝いますから手早くすませてさっさと帰りましょう。」
そう言って私のデータボードに忌々しい書類データが送信する。

「すまないな、私の所為でお前さんまで。」
流石にはつが悪くなり軽く頭を下げた。

「そう思うなら一つ貸しです。そこまで言っのでしたらこの始末書を書き終えたら私の要望に答えてもらいましょうか？」

——そう言って何やら含みのある笑みを浮かべながら少し機嫌がよさそうに彼女は笑った。

第十四話（作者：からすみそ）（前書き）

遅れてごめんなさい。
い、忙しかったです。

第十四話（作者：からすみそ）

ざ、ざざざざ。

未来と過去が混線している。

「要望？ 私に答えられるなんて、何もないと思うが」

視界が一瞬だけばやけたような気がした。

眼の前にいる彼女の微笑みが、どこか遠くにいるように感じる。

「ふふふ、そんなに難しい事じゃないですよ」

ニコニコと楽しそうに微笑む彼女。そんな彼女に私は小さく肩をすくめる。

彼女はいつもそうだった。

いつも私に楽しく微笑んでくれ、いつも私の後ろについてきた。私を頼りにしてくれ、私の無愛想加減に時々呆れたり、すねたりもしていた。

眼の前にいる彼女。

まだ10才ほどの幼いその姿で、クルクルと花のように笑う彼女。

「お前の難しくないは、難しいんだ。この前だって――」

この前だって、なんだっただろうか？

ぽっかりと心に穴があいているのを感じる。

それと同時に、眼の前の少女に大きな違和感を感じ始めていた。

「そんな事ないですよ。今回の私の願いは――」

ကု ကုကုကုကုကုကုကု

ノイズが入り混じる。眼の前の少女の姿が、ブレ始める。

「な、何が」

思わず呻き声、私の口から漏れ出した。

ぶれる視界。薄れる少女。何が起きたのか、理解が及ばない。

「——わたしだ……い。す……げんに返事をしないと本当に循環機構を停止しますよ」

眼の前の彼女の姿が薄くなり、耳元からそんな声が聞こえてくる。

一体何の声だと、耳元に手を当てると、そこには外したはずのインカムの感触が確かにあった。

「聞こえてますか？　しっかりしてください。いつものふてぶてしさはどうしたんですか？」

ふてぶてしいのはお前の方だ。

そう言おうとしたが、口が上手く動かない。今、自分がどこにいるのかが曖昧になり、自分自身の時間が崩壊していくような物を感じる。

今の自分は誰で、過去の自分は何で、未来の自分はどうだったのか。

未来と過去が混線する。

一定に進むべき時間が混ざり合い、溶け合い、この場にある全ての支配から解き放たれようとしている。

こ、
れ

は、

マ

ズ

イ

「しっかりしてくださいっ！」

耳元から聞こえる甲高い大声で、私は眼を覚ました。

一体何があったのか、一瞬の内には理解することが出来ずに、辺りを見回した。

そこで見たのは行き交う人々。

高いビルに、豪華絢爛なホテル。そして、終わることのない朝の混雑だった。

「……ここは、プラント」

一体いつの間にこの場所に帰ってきたのか、私はしばし呆然としていると、耳元のインカムから、深く息を吐き出す音が聞こえてきた。

「通信が回復しているのか？」

インカムを少しいじりながら、その奥にいるだろうオペレーターに向かってそう尋ねる。

「ええ、時間崩壊に撒きこまれかけていた貴方よりも、完全に回復していますよ」

安堵したような、呆れたような口調で、そんな皮肉事が返ってくる。

どうやら間違いなく、現在のアイツのようだ。

「それで、どんな時間崩壊に撒きこまれたんですか？

随分と自我を保つのが遅れてたようですが、そんなにキツイ時間でしたか？」

機械越しに心配そうに尋ねてくるオペレーターに、私は思わず笑みを零すと、小さくつぶやくように言った。

「……いや、いいものを見た。

昔のお前は、あんなに可愛かったんだな」

「なっ」

予想外の言葉だったのだろう。インカムの向こうで、驚いたような声が聞こえてきた。

その様子を想像して、思わず笑みがこぼれおちる私に、現在の彼女は大きくため息をはきだすと、丁寧に訂正するように言った。

「人の黒歴史を掘り返さないでほしいですね。

あなたを異性として意識していたのは、一時の気の迷いですから。いえ、そもそも恋愛感情というモノが、感情の迷いなんですよ」

「……全く、本当に可愛くなくなったもんだ」

呆れたような彼女の声に、私は思わずそう呟きながらコンテナに戻り帰る準備を終えると、プラントの外へと足を踏み出した。

一瞬で、私の体が再び構築され、砂漠の世界へと放り出される。

しっかりと現在の砂漠を踏みしめると、私は元来た場所へと足を踏み出した。

「それにしても、プラント内部すら崩壊が始まったか」

これはマズい事だ。

砂漠の道を歩きながら、これから本部に報告するべき事を頭の中でまとめ始めた。

とりあえず、オモチャとDEBスーツ以外全て消費してしまった事は、時間崩壊の所為にしようか。

第十四話（作者：からすみそ）（後書き）

ようやく、物語が始まったような気がしますね。
まだ、プロローグですが。

第十五話（作者：一旦三食）（前書き）

遅れて本当にごめんなさい

第十五話（作者：一日三食）

砂漠の中を暫く歩く。

いくら陽が照っていないとはいえ、砂漠は足場が悪く歩きにくい。時間がかかる。

技術科などがある本部へは、さっきまでいたプラントから距離は離れているが、急げばそれほど時間はかからないだろう。だが、報告内容を整理しながら歩いたために足が動くペースは遅かった。

プラントの内部で時間崩壊に巻き込まれるようになるとは……プラントの内部で直接働く人間は少ない為もあるだろうが、今まで聞いたことは無かった。

電脳であるために精神にダイレクトに影響があつたのかもしれない、自分の報告の後で精密検査でも受けさせられる可能性を考えると気が重い。

砂漠を暫く歩いていると、比較的だが建造物の形が多く残っている場所に来た。

先ほどまでは殆ど形が残っておらずビルであることもわかり辛かったが、それらよりも後の時代に建てられた建造物なため、強度が違ふのだろう。

見渡す範囲では、建造物はやはりビルが多いが先ほどよりも丸みを帯びていたり、造形に凝った建造物もあるようだ。

先ほどは踝まで砂に埋まりながら歩いていたが、この辺りまでくると踵が埋まる程度になる。地盤が残っているか、もしくはこの下に周囲の建物の様に道路が残っているというわけだ。

以前、ここを歩いた時にあいつが詳しい説明を話していたような気がするが、他の事に気を取られて聞き流していた。ここまで来るとあいつのいる本部も近い。別に気持が早やっているわけではないが早足になってしまふ……おそらく足場の良さが原因だろう。

さっきまでのプラント内部はいくつもの層や区域に分かれている。出入りに使われている“ビルとホテルと雑踏の区域”の他に、封鎖されて一切関わる事が出来ない区域、生活に必要な物を生み出す層などがあると聞いている。

私が関わるのは、まだどのようなになるか未確定で危険な層のプラント（深層プラントと呼んでおこう。実際に深いかどうかは知らないが体感的に）とそこに通じるコンテナが中心なので、知らないだけで他にも利用されている区域があるのかもしれない…。

そのあたりは内部しか知らない自分よりプラントの外側で働いている人間の方が詳しいだろう。電脳世界で情報を収集し、プログラムを打たれて安定したプラントは、外側から操作出来るようになりこの崩壊した世界の中で生活する為に利用されているらしい。

考えているうちに到着した。

形が残っている建物が多い周りに比べると、特別な作りをしているというわけではない。周囲の建物と同じ世代の一般的な建物で、上階は崩れている部分が大半で……けれども入口と一階の部分の形だけはしっかりと残っていた。

周りと比べれば異様な様子だった。ひび割れもなく傾いてもおらず、一階だけは昔のままの姿を残したビルがそこにあった。

私は本部に着いた事に安堵し、まずは大きく深呼吸した。額ににじむ汗を拭きながら体についた砂を払う。

むこうは不意を突くつもりだろうから出来る限り余裕を持った態度で対応してやろう。彼女は面白く思っていないらしく、会話の棘

がまた増えるかもしれないが、それは甘んじて受とめる。

本部ビルの一階の扉を開け、ロビーに入る……フロントの部分に別に誰かが待っているわけではない。一見すると無人のロビーに見えるだろう。だが私は知っている、ここでは彼女が――

突然、背後から肩に手をぶっくらばうに置かれた。

「お帰りなさい、待ってましたよ？」

気配を消して不意を突いた割には抑揚のない……いまいち喜怒哀楽の掴み辛い声で話しかけられる。

振り向くとそこには神妙な顔をした彼女が立っていた。

第十六話（作者：大岸都心）

私はその瞬間同僚の手を両手でつかみ振り返った。

「はい！？」

動揺が見て取れるような声を上げられ思わず笑みがこぼれる。

「な、何するんですか！？変態ですか貴方は！」

予想外の事態に驚きながらも体裁を取り繕うと必死な声で訴えかける。

「そんな鳩が三点バーストで豆鉄砲貰った顔される未来はなかったがな」

ふん、と少し軽く笑いながら答える。

「ひょっとして気づいていたんですか？」

ある程度落ち着きを取り戻した同僚が訝しげに尋ねた。

「別に、時間崩壊の弊害でちょっと未来が予想できたただけ」

彼女の手から両手を離し、私はトリックを明かす。

現在の私の行動は予想された未来とは違ったものだ。

——そうしなければ崩壊に飲み込まれやすくなってしまう。

「分かりました。ではある程度の予想は尽きますね？」

やや棘のある言い方と瞳でそう告げる。

「報告書と始末書、それとあなたとスーツの検査の申請書類です。今回は時間崩壊が発生したとのことですのでおそらくはそれほど大した罰則はないでしょう」

「それにしてもまさか内部で時間崩壊が発生するとは予想外でした、そのせいで報告書が倍に膨れ上がっています」

「それと、オヤジさんから伝言です。オモチャが壊れていないか心配だから明日のいの一番に顔を出すようにとのことです」
説明を一気にまくしたてると彼女は息を軽く吸い込んだ。

「わかった、わかったよ。とりあえずデータをくれないか？」
やや狼狽しながらも私は話を進めようとする。

「すでに送ってありますから後で確認しておいてください。私もこれから報告書が山積みなのであまり構っては上げられません。何か不明な点があれば訪ねてくれてもかまいません」
そう、そっけなく言い放つ。

「昔はこんなに淡白な子じゃなかったんだがなあ」
一人こちる。

ぺちん。

頬に軽快な音と共に衝撃が走る。

「痛いな」

「痛くて結構、余計なこと言うと次はこの程度では済みませんよ」
目の笑っていない笑みを浮かべ私を睨みつける。

「悪かったよ、だからやめてくれ」

はあ、と溜息を吐きながらとりあえずの謝罪を述べる。

「ま、兎にも角にも報告書と始末書です。私も自分の分があるので少しなら手伝いますから手早くすませてさっさと帰りましょう」――

―どうせ検査などは明日に持ち越しでしょうし、と付け加える。

「そうだな。手早く済ませて料理でもしたいよ、私は」

私は率直な意見を述べながら予想された未来よりもずっと多いデータを眺め二度目の溜息を吐く。

「せいぜいお互い頑張る事ですね」

そう言っ同僚と私は自身のデスクのある部屋へと向かった。

デスクのある部屋は必要な物以外は全く置いていない質素な部屋であるものといえば仕事道具と資料の類程度だ。

その隅にある自分のデスクに腰かけると私は忌々しいデータの羅列を再確認した。

まず、比較的問題のなさそうな検査申請から目を通し、各項目に記入していく。

スーツの検査まである為難儀しそうではある。もしかしたらしばらく潜る必要性が無くなるかもしれないといった一抹の不安がよぎる。

次に、始末書。

私個人は始末書を書く回数が何度があつたためにこれはある程度マニュアル化している為に単純作業の連続となっている。

最後に、報告書を見て、私の手は微動だにしなかった。

どれほどの真実をちりばめていいものか、その内容を考えて頭を抱える。

「どうしたものかね、これは」

とりあえず問題のない個所の報告は打ち終わった。
後は肝心な個所の内容をどうするかだ。

第十六話（作者：大岸都心）（後書き）

前回私の手番でやつつけ仕事をした事をいろんな方々に申し訳ない
と思っております。真面目にごめんなさい。

第十七話（作者：からすみそ）

「何をサボってるんですか？ さっさと仕事してください」

目の前の書類で手を止めてしまっていた私に、彼女は呆れた様な口調でそう言ってきた。彼女の方を振り返れば、どうやら彼女に任された書類の大半は終わっている様で、今は記入漏れなどのチェックを行っており、此方を見ようともしていなかった。

「……いや、疲れたただけだ。書類仕事は私の性に合わないからな」

少しだけ考えた後、私はそう言っただけで誤魔化し、再び書類に目を落とす。そこには『プラント内部での取得物について』と書かれている書類があるだけだった。

どうするべきか。

そう考えてしまう。

あの深層プラントに潜った時、入手する事ができた『何か』。ただ私専用のメモリに保存されている筈だ。それ故に、この『何か』の存在について知っているのは私だけだ。

いや、何も横領しよう等という話ではない。

横領するならば、こんな文字通り何かも分からない『何か』よりも、充実させるべきコレクションは多数ある。仕事中に所持するオモチャだってその一つだ。

では、なぜ『何か』の取得を報告する事について躊躇してしまうかと言えば、先ほど巻き込まれた時空の崩壊が原因だった。

時空崩壊時に私の意識は過去にあったが、それはただ単純に過去を見たという話ではないのだ。過去を内包している現在、そして未来。幾つもの時間軸、世界軸の情報が頭の中に流れ込んでくるのだ。

それは、脳みそにナイフで直接記録を刻まれる様な痛みであり、常人には耐える事が出来ない感覚らしい。

しかしながら、幸いにも私にはそれに対して耐性があつた様で、痛みを感じる事も殆どなかった。その代わり、常人よりも注ぎ込まれた記録を、記憶する量は少ないらしいが。

だが、そんな私でも未来を見て多少の事は覚えている。

先程彼女に会った時も、その未来の記憶があつたからこそ、未来と違う行動を行う事が出来た。

そして、この『何か』に対しても、私は注ぎ込まれた記録を記憶していた。

私が記憶していた事は、一つ。

この『何か』により、この世界全土に時間崩壊が起こる。そして、その時間崩壊のトリガーとなっている行動が、私が『何か』を本部に提出する事の様だ。

トリガーというと大袈裟かもしれないが、だがそれは事実である。今回、私が見た未来では『何か』を提出後、何の音沙汰もなく再びプラントに潜る。そして潜っている途中で、時間崩壊が起きる。それは深層プラントだけではなく、世界全土を巻き込んだ大型の

時間崩壊だった。

『応答して！ 応答してよ！ 応答しなさいよ！ 貴方が持つてきたアレが暴走して——』

その時に最後に聞いた無線が、彼女のそんな言葉だった。

だからこそ、どうするべきかと私は悩む、——といっても、そこまで真剣に悩んでいる訳でもない。

そもそも、誰かの死というモノを時間崩壊で見る事は、割とある事だ。何故なら次の瞬間に人が死ぬ確率は、確かに存在している。故に、幾つもある時間軸の中で、死ぬ時間軸があってもなんら不思議ではない。

今回の事も、それと同じだ。

態々取り立てて騒ぎ立てまくる様な問題でもない筈だ。それに態々報告して、本部から色々と質問攻めにあえば、今回使用しまくったアイテムの事も全てバレるかもしれないしな。

さて、だったら時間崩壊を起こさないために、どうするか。

ここは、やはり何も得なかった事にして、そっと消去するべきだろうか。

第十七話 (作者：からすみそ) (後書き)

主人公はお馬鹿。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9690w/>

二十五世紀

2011年10月21日02時08分発行